

◇ 博物館だより ◇

財団法人 竹中大工道具館

TAKENAKA CARPENTRY TOOLS MUSEUM

〒650-0004 神戸市中央区中山手通 4-18-25

HP:<http://dougukan.jp>

TEL:078-242-0216

FAX:078-241-4713

E-mail:<http://dougukan.jp>

1. 博物館概要

竹中大工道具館は、4年間の準備期間を経て1984(昭和59)年7月1日、竹中工務店の企業博物館として開館し、1989(平成元年)11月24日には財団法人となった。今年で23年を迎えた大工道具専門の博物館である(図1)。

当館は、「建築の生産方式のシステム化が進み、工場生産と省力化による効率化が優先し、電動工具が普及する現代にあつて、次第に消えていく古い時代の道具、優れた道具を民族遺産として収集、保存し、これらの研究、展示を通じて工匠の精神や道具鍛冶の心を後世に伝えていく」(『設立趣旨』より)ことを目的としている。



図1
竹中大工道具館 外観(正面)

2. 展示品の概要

当館は、鉄筋コンクリート造地上3階地下1階建、外壁は本漆喰仕上げであり、総床面積900㎡のうち展示スペースは570㎡である。収蔵品の多くは、別建物である収蔵庫に保管しており、その総数は約24000点にのぼる。そのうち道具類は、約17400点で、その中には外国の大工道具約2800点も含まれており、日本の大工道具だけでなく、ヨーロッパおよび東アジアの大工道具についても収集している。

次に、各展示室は次の通りである。

1階:

「道具の歴史」をテーマに、先史時代の石器から現在に至るまでの大工道具の発達、変遷の経過を日本建築史を背景として、復元品、実物、写真、絵巻物などを展示している(図2)。



図2
竹中大工道具館 展示室(1階)

2階:

「木と匠と道具」をテーマに、木を中心とした建築技術の伝統を展示している。古代から日本建築の母体となった木材の種類とその分布や木の特性を示すとともに、それを熟知して加

工構築を極めてきた工匠の技を紹介している。また、継手や仕口など原寸模型も展示している(図3)。

3階:

「道具と鍛冶」をテーマに、木材の伐木、製材から加工、仕上げに至るまで、その目的に順じて、使い込まれてきた道具を展示している(図4)。大工はよりよい道具を求め、それに道具鍛冶が応えて槌を振るって製作された、名工品も多く展示している。



図3
竹中大工道具館 展示室(2階)



図4
竹中大工道具館 展示室(3階)

地階:

ミニ企画展やビデオブースを設置しており、セミナーなどを行うための多目的ルームも備えている。

3. 大工道具の管理

上記のような展示を行うために、当館の収蔵品管理方法は以下の通りである。伝世品については、すぐに使える状態での保存を原則としている。

そのために、当館には、長年寺社建築に携わってきた宮大工の棟梁が、技能員として勤務しており、道具の管理全般および鉋や鑿の刃物研ぎなどに従事している(図5)。

道具は、さまざまな経緯で当館に持ち込まれる。大工にとって道具は体の一部、あるいは体の延長でもあることから、道具を錆びさせることがないように日々の手入れが欠かせない。しかしながら、大工道具だけでも約12500点を収蔵している当館では、全ての収蔵品(大工道具)に同様の手入れを施すことは、並大抵のことで



図5
技能員による手入れの様子

(作業効率を重視しているため立位で行っている。現在、新たに座位専用の研ぎ場を計画中である)

はない。そのため現在、大工道具の状態、製作者などを調査し、A～D にランク分けを行い、それに応じた手入れを実施している。

4. 有形の「道具」と無形の「技術」

道具は、使われてこそ道具であり、博物館施設に展示・收藏されるのは、道具本来の姿ではない。しかし、冒頭の当館「設立趣旨」にも記述されているように、道具が次々消えていく昨今、せめて博物館で保管しておかなければ、人類の歴史の重要な部分が欠落してしまうことになりかねない。そのため当館では、人の手を常に加えることによって、このような有形の道具を保存・管理することが重要と考えている。

しかしながら、それだけでは道具の「使い方」や「作り方」といった無形「技術」を後世に伝えてゆくことは困難である。本来、技術の伝承とは、「技術」を体得した人間が、次の世代の人間に伝えていくことが必須である。ところが、道具の「使い方」や「作り方」などの伝統的な技術は、現代において、後継者がいないまま消え去ろうとしている。少しでも無形の「技術」を保存するために、小規模な博物館ながら次のような努力を続けている。

第一に、映像資料の制作である。現在までに収録した映像は次の通りである(表1)。風前の灯となっている無形の「技術」を少しでも多く記録し、後世に伝えることは、時間との戦いという状況にある。近年撮影した映像資料「天然砥石 京都 日照山の合砥」においても、2004年に採掘場は閉山し、早くも遺産映像となってしまった。このようなことは珍しい事例ではない。

表1 竹中大工道具館 映像資料一覧

大工道具館の紹介	分	大工道具をつくる	分
大工道具と日本建築の歴史	10	墨壺を彫る	7
大工道具—その技と心—	22	斧をつくる	7
		ちょうなをつくる	9
建築技術と道具の歴史	分	黒打ち鋸をつくる	7
縄文の技	10	木の葉鋸をつくる	15
古代の道具を復元する	23	のみをつくる	9
規矩術	7	玄能をつくる	6
大鋸	5	錐をつくる	7
前挽大鋸	6	かんなをつくる	8
台切り大鋸	4		
木挽職*	23	木を組む	分
やりがんな	3	腰掛大蟻継	5
削る	5	腰掛鎌継	6
		金輪継	5
大工道具を使う	分	台持継	6
じょうぎ	7	京呂組	7
すみつぼとすみさし	5		
けびき	6	道具の手入れ	分
図板をかく	3	めたて	6
まさかりとちょうな	5	天然砥石	7
のこぎり(基本鋸)	6	刃物の工夫ととぎ	7
のこぎり(用途別鋸)	5	のみをとぐ	11
たたきのみとおいれのみ	8	とぎ	7
仕上げのみと特殊のみ	4		
彫刻のみと彫刻刀	5		
きり	5		
かんな(平鉋)	9		
かんな(特殊鉋1)	6		
かんな(特殊鉋2)	5		
木工機械と電動工具	7		

※第32回日本産業映画ビデオコンクール大賞作品(平成5年)

少しでも早く、消えつつある無形の「技術」の情報を察知する努力も重要なことであると考えている。

第二にデジタルアーカイブの作成である。日常生活にパソコンが普及し、一般の方が、手軽に大工道具の名前や種類などを検索できることを目指して、現在準備中である。

第三に『研究紀要』を中心とした、各分野の地道な研究をもとにまとめられた文字による「技術」の保存である(図6)。

最後に『技と心セミナー』や講演会を初めとして、研究成果を一般の方に広く公開することを目指している。

そして、未来を支えていく子どもたちには、「体験教室」や、学校に出向き講義を行う「出張授業」(図7)を通して、大工道具に触れる機会をつくるとともに「モノづくり」の楽しさを伝えていく。

以上のように竹中大工道具館は、長い歴史と伝統を持つ木の加工技術、道具を作る技術などを通して、匠の技と心を後世に伝えていくために、日々、活動を続けている。

【博物館の案内】

- 休館日 : 月曜日(祝日の場合は翌日)
年末年始(12月26日～1月7日)
- 入館料 : 一般/個人 300円, 団体 250円
大・高生/個人 200円, 団体 150円
小・中生/個人 100円, 団体 50円
(20名以上の場合は団体割引)
- 交通案内 : JR・阪急・阪神「三宮」駅徒歩 18分
JR・阪神「元町」駅徒歩 10分
地下鉄「県庁前」駅徒歩 5分
新幹線「新神戸」駅タクシー7分
- 開館時間 : 9時30分～16時30分(入場は16時まで)



図6 竹中大工道具館の出版物



図7 体験教室の様子



(研究員: 船曳悦子)